

奥能登観光資源の創造的復興のモデルケースづくり

指導教員	石川工業高等専門学校（当時）				
	准教授 豊島祐樹				
	教授 村田一也				
	金沢工業大学 准教授 片桐由希子				
参加学生	石川工業高等専門学校				
	5年	林恭平	東稜子	石橋矢煌	北室葉那子
	4年	池田茉結	島崎真鳳	二宮琉偉	門田啓矢
		鋤柄満帆子	高野凜夏	安井幹造	安藤望心
	金沢工業大学				
	4年	宮本悠太			
	3年	小田伊吹	本多紗和	山下太陽	吉田樹
		島知滉	石川晟士	山田愛翔	黒河桂斗
					川西康介
					桂田涼

活動にご協力いただきました、やなぎだ植物公園の利用者の皆さま、NPO 法人ボランティアインフォの皆さま、能登町ふるさと振興課の皆さま、合同会社能登みらい創造ネットワークの皆さまに感謝申し上げます。

奥能登観光資源の創造的復興のモデルケースづくり

連携した地域団体：合同会社能登みらい創造ネットワーク

石川工業高等専門学校 豊島研究室・村田研究室 / 金沢工業大学 片桐研究室

1. 活動の成果要約

本活動は、令和6年能登半島地震後の復興を目指し、やなぎだ植物公園を地域活性化の拠点とするための観光プログラムの検討と実践を目的として行った。地域の祭りや復興関連イベントに参加し、地域住民と交流を図るとともに、復興に求められていることを把握した。公園利用者の意見収集を通じて、特に求められていることなどを明らかにした。現地合宿では、キャンプエリアやウォークラリーのチェックポイントの検討を行った他、古民家の見学を行い、歴史的建築物を活用した観光構想も議論した。北側の里山エリアの活性化案では、合鹿庵を中心とした古民家移築やリノベーション、自然と融合したフォリーの設置を提案し、公園の多機能化と地域資源活用の可能性を追求した。

2. 活動の目的

能登半島は以前から急速に人口減少や少子高齢化が進む地域であり、震災に対し地域資源を活かした復興のビジョンが求められている。やなぎだ植物公園は比較的震災による被害が少なく、消防緊急援助隊の拠点としても活用され、地理的な条件からも奥能登にとって重要な拠点であるといえる。今年度のゼミ活動では、地域資源を活かした復興を意識した観光プログラムの検討と実践を行い、地域活性化の拠点としての公園のモデルケースをつくることを活動の目的とした。



図 やなぎだ植物公園の位置 (Google maps より)

3. 活動の内容 4. 活動の成果

●能登町のあばれ祭や復興関連イベントへの参加： 7/5(金)～6(土)に行われた「あばれ祭」に参加し、地域研究拠点で元所有者や親戚の方々と学生が交流を行った。参加学生は「あばれ祭の迫力やヨバレの文化から、能登の力強さや絆を強く感じ、能登の文化に魅力を感じた」「能登を離れた人が戻って来られる場所づくりに関わりたいと思った」などの感想を持ち、今後の復興のヒントを得た。「の未来カイギ」の運営協力を行い、祭りや景色を残すこと、子どもたちが遊べる場所が必要とされていることが分かった。



図 あばれ祭の様子



図 第1回のの未来カイギの様子

●やなぎだ植物公園利用者の意見収集： やなぎだ植物公園の利用者の意見収集を行った結果、今後の希望としてはアスレチックや遊具の充実を求める声やスポーツができるようにしてほしいとの声が多く、次いで音楽イベントやキャンプができるようにしてほしいとの声も多かった。その他、具体的に変えたいところとして、公園内の植物の名前の表示をすることや、屋根をつけて雨や日差しを避けられるようにすることがあげられた。



図 やなぎだ植物公園の利用者の意見収集の様子

●やなぎだ植物公園での合宿： キャンプに適した場所を3つに絞り、それぞれの場所の評価をした。ウォークラリーのチェックポイントは、公園内をまわった上で高低差がきつく歩きにくいところは避け、①イングリッシュガーデン、②野外ステージ、③森づくり体験エリア、④花菖蒲園、⑤キリシマツツジの林、⑥ツツジ、⑦合鹿庵、⑧水車小屋、⑨出会い橋の9か所を提案した。植物の名札や各エリアの看板についてQRコードを活かした提案を行った。

能登町郷土館、中谷家住宅、やなぎだ植物公園内の合鹿庵の見学し、被災した歴史的建築物の状況を把握するとともに、今後の建物の活かし方について検討を行った。やなぎだ植物公園の北側の里山エリアが十分に活用されていない状況から、合鹿庵を中心にエリアを活性化させる提案を行った。具体的な提案として、①合鹿庵のリノベーション、②古民家の移築・活用の提案、③里山に点在するフォリー（小建築）の提案を行った。



図 現地での検討の様子



図 検討内容の発表や議論の様子

5. 次年度以降の計画 6. 活動に対する地域からの評価

今後も研究室として継続的にやなぎだ植物公園に関わり続け、将来構想や具体的な整備の検討、利活用の実践を行っていききたい。

連携団体である合同会社能登みらい創造ネットワークの代表・竹内氏から「若い世代である学生の皆さんが関わってくれることや、公園の将来構想や具体的な整備案について可視化してもらえることがありがたい」との評価をいただいた。

1. 活動の要約

本活動は、令和6年能登半島地震後の復興を目指し、やなぎだ植物公園を地域活性化の拠点とするための観光プログラムの検討と実践を目的として行った。地域の祭りや復興関連イベントに参加することで、地域住民と交流を図るとともに、復興に求められていることを把握することができた。また、やなぎだ植物公園の利用者の意見収集を通じて、アスレチック・遊具の充実やスポーツがよりできるような整備が特に求められていること、キャンプエリアや植物の名札などの提案が求められていることが分かった。さらに2度の現地合宿では、キャンプエリアの候補地検討やウォークラリーのチェックポイントの検討を行った他、郷土館や合鹿庵などの見学を行い、歴史的建築物を活用した観光構想も議論した。北側の里山エリアの活性化案では、合鹿庵を中心とした古民家移築やリノベーション、自然と融合したフォリー（小建築）の設置を提案し、公園の多機能化と地域資源活用の可能性を追求した。これらの活動を通し、やなぎだ植物公園において復興と観光資源開発のモデルケース構築に向け具体的な成果を生むことができた。

2. 活動の目的

能登半島は以前から急速に人口減少や少子高齢化が進む地域であり、令和6年能登半島地震に対し地域資源を活かした復興のビジョンが求められている。今回連携する合同会社能登みらい創造ネットワークは、能登町のやなぎだ植物公園において、観光資源開発に取り組もうとしている。やなぎだ植物公園は比較的震災による被害が少なく、消防緊急援助隊の拠点としても活用され、地理的な条件からも奥能登の観光にとって重要な拠点であるといえる。今年度のゼミ活動では、2022年度に作成した将来のゾーニング案を元に、地域資源を活かした復興を意識した観光プログラムの検討と実践を行い、地域活性化の拠点としての公園のモデルケースをつくることを活動の目的とした。

3. 活動の内容

毎週のゼミでの検討の他、能登町の祭りへの参加や復興関連イベントの運営協力、やなぎだ植物公園利用者の意見の収集、やなぎだ植物公園での合宿を行った。以下にそれぞれの内容を記す。

○能登町のあばれ祭や復興関連イベントへの参加

7/5(金)～6(土)に行われた「あばれ祭」に参加した。地域研究拠点の元所有者や親戚の方々と学生が交流を行った。

能登町が主催する7/14(日)の「第1回のと未来カイギ」と8/18(日)の「第2回のと未来カイギ」の運営協力を行った。



図1 あばれ祭の様子



図2 第1回のと未来カイギの様子

○やなぎだ植物公園利用者の意見収集

やなぎだ植物公園内のレストラン棟で8/11(日)～18(日)の期間、利用者の方々の意見を集めた。「やなぎだ植物公園の好きなところ・おすすめポイント」「やなぎだ植物公園でやってみたいこと」「やなぎだ植物公園のここを変えたい」「やなぎだ植物公園をこんな公園にしたい」の4つの質問に対する回答を付箋に書いて貼ってもらった。収集した意見について整理・分析を行った。



図3 やなぎだ植物公園の利用者の意見収集の様子

○やなぎだ植物公園での合宿 (1回目)

1回目の合宿を9/10(火)～11(水)に行った。NPO 法人ボランティアインフォのテントを借りていた、公園内でのキャンプに適したエリアについて、実際に現地でテントを広げて検討を行った。別のチームは、ウォークラリー（オリエンテーション）のチェックポイントの検討を行った。その他、植物の名札や公園内の各エリアの看板についてどのようにしたら良いかの検討を行った。

最後に、やなぎだ植物公園の指定管理者である合同会社能登みらい創造ネットワークの代表・竹内氏に検討内容を発表し、コメントをいただいた。



図4 現地での検討の様子



図5 検討内容の発表や議論の様子

○やなぎだ植物公園での合宿 (2回目)

2回目の合宿を12/21(土)～22(日)に行った。1日目には能登町郷土館の見学、合鹿庵の見学を行った。2日目には、里山エリアのうち文化ゾーンについて、奥能登の古民家移築も含めた新しい構想の

提案を行い、合同会社能登みらい創造ネットワークの代表・竹内氏と意見交換を行った。その後、国の重要文化財である中谷家住宅の見学を行った。



図6 合鹿庵見学の様子



図7 プライベートプラネタリウム体験の様子



図8 プレゼンの様子



図9 プレゼン後の意見交換の様子

4. 活動の成果

○能登町のあばれ祭や復興関連イベントへの参加

7/5(金)～6(土)に行われた「あばれ祭」に参加し、能登町宇出津にある地域研究拠点で元所有者や親戚の方々と学生が交流を行った。参加学生は「あばれ祭の迫力やヨバレの文化から、能登の力強さや絆を強く感じ、能登の文化に魅力を感じた」「能登を離れた人が戻って来られる場所づくりに関わりたいと思った」などの感想を持ち、今後の復興に関するヒントを得た。

7/14(日)の「第1回のと未来カイギ」と8/18(日)の「第2回のと未来カイギ」の運営協力を行った。

参加者から様々な意見があがる中で、祭りや景色を残すことや子どもたちが遊べる場所づくりが必要とされていることは広く共通する意見であることが分かり、その後の公園での活動に活かすこととした。

○やなぎだ植物公園利用者の意見収集

やなぎだ植物公園の利用者の意見収集を行った結果、今後の希望としてはアスレチックや遊具の充実を求める声やスポーツができるようにしてほしいとの声が多く、次いで音楽イベントやキャンプができるようにしてほしいとの声も多かった。その他、具体的に変えたいところとして、公園内の植物の名前の表示をすることや、屋根をつけて雨や日差しを避けられるようにすることがあげられた。

○やなぎだ植物公園での合宿（1回目）

1回目の合宿では、以下の成果が得られた。

公園内でキャンプに適した場所の検討については、現地調査を進める中で候補の場所を3つに絞り、それぞれの場所の良い面と良くない面を整理した。水回りの整備が必要なことは3つの場所で共通していたが、水回りの整備によってすぐにキャンプ地として整備できそうな場所はなく、それぞれ地形の傾斜を緩やかにしたり、湿度が高いのを改善したり、プライバシーや他の利用者からの景観に配慮したりといった改善策が必要であり、引き続き様々な面から検討が必要である。

ウォークラリーのチェックポイントは、公園内をまわった上で高低差がきつく歩きにくいところは避け、①イングリッシュガーデン、②野外ステージ、③森づくり体験エリア、④花菖蒲園、⑤キリシマツツジの林、⑥ツツジ、⑦合鹿庵、⑧水車小屋、⑨出会い橋の9か所を提案した。このチェックポイントを組み合わせることで、難易度や所要時間を調整できるようにしている。

その他、植物の名札や各エリアの看板について検討を行った。植物の名札は、名前、花が咲く時期、花言葉などを表示することが意見としてあがったが、情報量が多いと名札が大きくなってしまいうため、詳しい情報はQRコードで読み取って見られるようにする提案をした。QRコードを読み取ることによってスタンプラリーの機能を持たせる案も出た。各エリアの看板については、エリアの広さにより1つか必要最小限の数としてQRコードを読み取ることによりエリア情報が得られるように考えた。

○やなぎだ植物公園での合宿（2回目）

2回目の合宿では、以下の成果が得られた。

能登町郷土館、中谷家住宅、やなぎだ植物公園内の合鹿庵の見学し、被災した歴史的建築物の状況を把握するとともに、今後の建物の活かし方について検討を行った。

やなぎだ植物公園の北側の里山エリアが十分に活用されていない状況から、合鹿庵を中心にエリアを活性化させる提案を行った。具体的な提案として、①合鹿庵のリノベーション、②古民家の移築・活用の提案、③里山に点在するフォリー（小建築）の提案を行った。

①合鹿庵のリノベーションでは、合鹿庵を里山エリアにおける総合受付・インフォメーションセンター、物販所、アートと特産品の展示所としての機能を持たせた。

②古民家の移築・活用の提案では、郷土館を移築してオーベルジュとして活用し、能登の魅力でもある食と自然を活かす提案とした。まずは郷土館の移築の具体的な提案を行ったが、今後は奥能登の古民家の「移築保存地区」として移築件数が増えていく将来像も描いた。

③里山に点在するフォリー（小建築）の提案は、やなぎだ植物公園の自然の美しさを引き立てること、日差しや雨・雪から守られた休憩場所とすること、里山を遊び場・学び場とするための展示機能等とすることを目的としている。フォリーは、その場所に合わせて池、花、林道、樹木など引き立てる自然を設定した小建築を提案した。

5. 今後の活動計画

今後も研究室として継続的にやなぎだ植物公園に関わり続け、将来構想や具体的な整備の検討、利活用の実践を行っていききたい。

6. 活動に対する地域からの評価

連携団体である合同会社能登みらい創造ネットワークの代表・竹内氏から「若い世代である学生の皆さんが関わってくれることや、公園の将来構想や具体的な整備案について可視化してもらえることがありがたい」との評価をいただいた。